

特集1

デジタルテクノロジーとジェンダー、 セクシュアリティ、親密性

田中洋美

特集にあたって

21世紀に入り、未曾有のスピードとスケールで社会のデジタル化が進んできた。それに伴い様々な社会問題が生じている。ジェンダー研究に携わる者もこの新たな社会生成を無視することはできないであろう。なぜなら現在進行中の社会秩序の再編においてジェンダーやセクシュアリティに関する様々な現象が起きており、ジェンダー研究において培われてきた視座、すなわち差異と不平等、支配と権力をめぐる問題を批判的に論じる視座が今まさに求められているからである。

筆者は2010年代初頭からソーシャルメディアに関心を寄せ、2010年代中頃からその研究に取り組んできた。その中でより広い社会的文脈で新たなネットワーク化されたコミュニケーションについてジェンダーの視点から考えることの重要性に気づかされてきた。社会がデジタル化する過程で立ち現れた新たな支配構造は差異や権力関係の再生産を伴っているからであるが、ジェンダー研究者として看過できない問題であるとの認識から「デジタルテクノロジーとジェンダー」と題した論考を記した(田中, 2023)。

この問題関心を広く共有する必要性を感じていたことから、2021年大会では「デジタルテクノロジーとジェンダー」をテーマに基調講演とシンポジウムを企画した。論じるべき点を全て取り上げることはできなかったが、「データ」の持つ権力性について、またネットワーク化されたコミュニケーションとジェンダー／セクシュアリティ秩序との関連について議論する機会を作ることにはできたように思う。本特集では、その記録を兼ねて、同大会の基調講演者とシンポジウムの報告者・討論者の論考を収めている。

キャサリン・ディグネイジオ氏(マサチューセッツ工科大学)による「データ・フェミニズム」は、基調講演の内容を再構成したものである。ディグネイジオ氏は、フェミニストであり、データサイエンスの研究者であり、またアー

ト作品の制作・展示の実績を持つアーティストでもある。本特集に収められた論考では、ディグネイジオ氏がローレン・クライン氏（エモリー大学）と共に記した *Data Feminism* (MIT Press, 2020) の主たる論点を整理し、データ化という社会過程における差異・権力の問題とフェミニズム的な介入の可能性について論じている。

続く3本の論文はいずれも2021年大会シンポジウム「デジタル化時代におけるジェンダー、セクシュアリティ、親密性」に関する。このシンポジウムでは、出会いのために開発・商品化されているマッチングアプリに焦点を当てた。ソーシャルメディアの中でもとりわけマッチングアプリの登場は、恋愛、結婚、ジェンダー、セクシュアリティに関わる親密関係に大きな影響を与えている。にもかかわらず国内では研究が少ないという現状がある。本特集に収められた論考はマッチングアプリに関するジェンダー研究の貴重な資料となるであろう。

チャン・リクサム氏の「マッチングアプリ文化におけるネットワーク化された性的公衆の出現」は、中国のマッチングアプリ利用についてジェンダー／クィアの視点から論じたものである。多様なアプリが存在し、利用者数も多い中国で行った性別、性的指向など様々な背景を持つアプリ利用者を対象とする聞き取り調査を基に、マッチングアプリを通じて人々はどのように他者と繋がり、何を経験しているのか、またそこでいかなるジェンダーの社会過程が起きているのかを論じている。チャン氏が提唱する「ネットワーク化された性的公衆 (networked sexual publics)」という概念は、マッチングアプリを使ったデジタルかつ公的なコミュニケーションを通じて生まれた公衆を指すが、それは既存の性規範からの解放と家父長制的な文化実践の反復によって特徴づけられており、極めて両義的な様相を呈している。

チャン氏が利用者の意識やアイデンティティに迫ったのに対して、高馬京子氏の「日本のメディアで構築される異性愛恋活・婚活マッチングアプリの利用者という女性像の表象」は、メディアにおいて構成される利用者像を検討している。雑誌の言説分析を通じて多様な女性像が構成されていることを明らかにしているが、性的二重規範や結婚規範からの解放とも捉えられる言説が結婚・若さ重視の規範の強化を伴いながら生み出されているとの指摘は、チャン氏が指摘する両義的なジェンダー変容と類似した状況が日本でも起きている可能性を示唆している。

続く砂川秀樹氏の「日本のゲイアプリをめぐる多様な経験」では、日本の男性同性愛・両性愛者向けマッチングアプリの利用者の「声」に焦点を当て、利用体験や意識を考察している。砂川氏が明らかにするのは、利用経験の多様性であり、また利用者の共通体験としての「可視化の衝撃」である。アプリが利

用者の意識や行動に与える影響, アプリへのアクセスをめぐる包摂と排除等々, 様々な論点を浮き彫りにしており, 今後更なる研究が待たれる。

以上4本の論考は, デジタル化が急速に進んだ現代社会のジェンダー化の様相について考える上で新たな視点を与えてくれるはずである。本特集が更なる議論につながることを期待したい。

(たなか ひろみ 明治大学)

[参考文献]

田中洋美 (2023), 「デジタルテクノロジーとジェンダー——ソーシャルメディア, データ, 人工知能をめぐる権力論に向けて」高馬京子・高峰修・田中洋美編著『デジタル社会の多様性と創造性——ジェンダー, メディア, アート, ファッション』明治大学出版会